



今日といふ未知や姫芝実をつける
 秋風や鄙の面輪のお前まへ立たち
 脱皮せぬ人間虫を越えられず
 母許の月よ環状列石よ
 おはぐろのひらひら母は亡かりけり
 牧帰り寮を戻りし子のごとく
 稲光神の創りしテロリスト
 滑齒菟飢うる子の眼の潤みたる
 馬頭琴きかせ駱駝の眸に銀河
 葬列の先の明るし遠かなかな
 地球とは流星受くる鍋のごと
 広くある湖の洲浜や秋暑し
 *
 猪の三十棒を喰らふなり
 妄想が好きで夜更けの蚊遣豚
 御巢鷹忌草木きくの風ぴたと止む
 堤保徳
 中里結
 矢島惠
 清水道径
 満田光生
 安部克詠
 吉澤清
 西牧千恵子
 田中優子
 海野恵子
 三品吏紀
 河合照子
 二木暖
 丸山貴史
 宮岡光子

伝へたき祝ほろのあるらし法師蟬
 もう友と呼べぬ仲なり青胡桃
 隅っこに塵睦まじき秋の暮
 秋天は真水の中にあるごとし
 やどり木にやどられてゐる秋思かな
 海の眼のいつか川の眼鮭のぼる
 襟足に鱗の生えさうな残暑
 定家葛寝しなの闇をほの白く
 滝壺は戦の果てぬ地球かな
 流れ星いくつ墜ちても空に星
 *
 ファレンツェからプラハへ輪行夏終わる
 黒ぶだう熟れギャルソンの謙讓語
 軒下に水槽のあり敗戦忌
 吾も菩薩されど番外寝待月
 虫鳴けば虫のにおいの廊下かな
 山崎和之
 森山夕香
 岩上諒磨
 倉科繁登
 小林貴子
 小勢元貞
 許勢元貞
 島田葉月
 是津さち子
 松原壽美子
 沖野外輝夫
 上田さち代
 草野薫子
 三谷正男
 櫻井喬二
 細江毛玉

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭寸言 昭和の戦後の俳句史を見る上で、季語重視の有季派が保守で、無季容認の俳人グループは革新との便宜的な区分けを私は好まない。政治の世界の俗な分類は文学である俳句の世界には馴染まない。

では俳句表現で何が問題になるのか。それはつねに俳句とは何かという永遠の課題に、自分のことばで挑戦する冒険がいささかでもなされているか。一句でも、初めての新鮮さがあるかどうかである。

今日という未知への挑戦——「姫芝」という地面からの立ち上げ

今日といふ未知や姫芝実をつける 堤 保徳

「姫芝」はどこにでもある。誰もが見ている。しかしほとんど無視される。関心が向くような華やきがない。秋になり、作者は道端のいつも踏まれている姫芝がささやかな実をつけたことに、ある時、気付いた。なぜ気付いたのか。内心に「無名」という大方の庶民感情を俳句の気付き（テーマ）にしたいという感情が動いたのである。私は、一読、同感した。私が意志的に求めている俳句の未知の分野であったからである。

脱皮せぬ人間虫を越えられず 矢島 恵

稲光神の創りしテロリスト 吉澤 清

パレスチナゲリラなど中近東テロリストの報道を耳にする。まさに「神が創りし」という大袈裟な表現が納得できる。彫りの深い根源に迫る句として感銘した。

滑齒竟飢うる子の眼の潤みたる 西牧千恵子

敗戦直後は庭先の滑齒竟も湯掻いて口にした。味がなかった。その体験が現代の飢餓を想像する上に役立つ。世界は一つ。同胞意識で身近に感じたい。

馬頭琴きかせ駱駝の眸に銀河 田中 優子

今月の秀句

秋風や鄙の面輪のお前立 中里 結

「お前立」とは秘仏の本尊に代わり厨子の前に置かれる仏像。善光寺の前立本尊が名高い。いかにも鄙びているという。作者はわが身にひびくものがあり、共感したのである。結さんの句では岳集の（九月来る雲のやうなる旅をして）にも感銘した。摺みどころがない旅とはどんな旅か。不思議な気持ちでいたところ、家を出て「岳」の例会句を書いた手紙をポストに投函しようとした途端に、不慮の交通事故に遭い、逝去されたという。ことばを失う。哀しみも折れたまま、衝撃だけがでんと置かれている。九月十九日、八十八歳。深悼。

虫が古い殻を脱いで生まれ変わる。人間は生れたまま。あ私には新生というチャンスがあるのかしらと思った。天空を詠う作者が晩秋の「虫」へ気付く。新鮮である。

母許の月よ環状列石よ 清水 道徑

母のもとでの月を配しながら、思い出したのは東北の鹿角市十和田にある「ストーンサークル」（石を環状に配置してある）。およそ四千年前、縄文後期の集団墓かあるいは祭祀や葬送などの儀式を行った所であるという。母制社会への連想が働いたものか。原始への思いが現代を超え、気持を立て直したいと考えたものか。

おはぐるのひらひら母は亡かりけり 満田 光生

すぐれた悼句である。おはぐる蜻蛉はいつも喪服を着ている。母も教育者であったとうかがう。含羞の俳人光生の地平にある確かな平常心をみる。哀しみが深い。

牧婦り寮を戻りし子のごとく 安部 克詠

「寮を戻りし」とは遊学中の子が夏休みなどで寮から家に戻って来たような久々の対面だということ。牛馬への直喩表現は暮しに引き付けた愛情がある。東北の地貌がある。

砂漠地帯の駱駝とともに暮す民への想像が、中近東の紛争以来身近になり、切ないことだ。刹那の悠久感に打たれる。

葬列の先の明るし遠かなかな 海野 恵子

先が晴れている。葬列の句にしては軽く詠われ注目した。

地球とは流星受くる鍋のごと 三品 史紀

身近な比喩「鍋」は単なる装飾や意匠ではない。地球そのものを鍋とみて、流星や星屑を受け入れるという発想が逞しい。宇宙を捉える空疎な句ではない。ことばに活力がある。

広くある湖の洲浜や秋暑し 河合 照子

海や川ではなく、湖の地味な洲浜へ目が行った。水が減っている。平凡で気付かないところをことばで掬い上げている。

雪嶺集・前山集から推薦候補をあげる。

凌がむと葉を落とす木や旱空 柁木 幸子
 蟬の穴生きつらき世の冥さあり 渡辺 真帆
 忘れぬし子の目の高さ芋の露 酒井 和子

妄想好き——夜更けの蚊遣豚の可笑しさ

妄想が好きで夜更けの蚊遣豚 丸山 貴史

生活の内側へ一歩踏み込んでいる。綺麗なことばを並べるのが巧みな作者であった。歌手修練の賜物なのか、語感が明るく、ことばのバランス感覚がいい。それを崩す身近なこと

ばの幹旋が困難であった。ここに来て一皮剥けた感じである。建築設備関係の設計の仕事も忙しい中で、公子奥方ともども熱心である。

御巢鷹忌草木の風びたと止む 宮岡 光子

一九八五（昭和六十）年八月十二日、群馬県上野村御巢鷹山（二五六五メートル）に日本航空一二三便が墜落し、五百二十名の死者を出した事故の忌日が御巢鷹忌である。日盛りに草木の風がはたと止んだ。風も黙禱をしたのであろう。鷹の巢がある山という山名もなまなましい。三十八年経っても記憶にある忌日が俳句に詠まれた。作者にも句作の契機があったもの。

伝へたき祝のあるらし法師蟬 山崎 和之

つくつく法師が主語。比喻とはいえ、名前が坊さん絡みの蟬の祝事である。おかしみもあろう。自由な発想がいい。

今月の秀句

猪の三十棒を喰らふなり 二木 暖

禅の修行者が警策をばしと受け止めるのが「三十棒」。それを猪が喰らったという。公案のような飛躍がかえって新鮮。わが身のことであろうか。深い思索がある。フランス留学を終え、東北大学を卒える由。新同人でもあ。一步一歩でいい。

襟足に鱗の生えさうな残暑 島田 葉月

残暑が厳しかった。首が照らされる。自ずから襟足に手をやる。鱗が生えるか、ひゃあ。

定家葛寝しなの闇をほの白く 是津さち子

寝に就く。目を塞ぐと臉の裏が白い。残像が残っている。窓外の木には定家葛が絡みついている。家が蔓草に巻かれるいささかの恐怖は老いの意識か。巧い作である。

滝壺は戦の果てぬ地球かな 松原壽美子

斬新ではないが、滝壺の比喻は渾沌たるさまを暗示する。戦に戦、残忍な地球に慣らされないようにしたい。

流れ星いくつ墜ちても空に星 沖野外輝夫

初々しい。子ども心が働き、素朴な疑問が生きている。どうして星がなくならないものか。

青雲集

フィレンツェからプラハへ輪行夏終わる 上田さち代

自転車を積みイタリアのフィレンツェからチェコのプラハへ。若者の夏休みもこれでお仕舞。大胆で無謀な青春の夏。

黒ぶだう熱れギャルソンの謙讓語 草野 薫子

黒葡萄が盛り、葡萄園に囲まれたフランスのレストラン。

もう友と呼べぬ仲なり青胡桃 森山 夕香

仲違いでもあったか。珍しい着想の心理詠である。いまだ未熟な青胡桃は内心の忸怩たる迷いを暗示している。中年の気持の深層を詠まれた句として注目した。

隅つこに塵睦まじき秋の暮 岩上 諒磨

およそ生活臭がない。そうかといって風狂の隠者暮しを暗示してもいない。いわば塵を主人公に睦まじい塵夫婦の円居を描く。じめじめ薄暗い秋の暮ではない。メルヘンチック。愉快な作り手が誕生したものだ。祝福。

秋天は真水の中にあるごとし 倉科 繁登

伴侶をなくされた。その哀しみのやり場を探し、真水の中の深处に澄んだ秋天を見出したものか。秋天は奥方の微笑ではないか。象徴句として読んだ。

やどり木にやどられてゐる秋思かな 小林 貴子

樺のやどり木が目立つ冬が近い。掲句は黄色いやどり木に宿を貸している宿主のさみしさである。大らかさを信条にちまましたくないが、虫のいいやどり木にはいささか閉口。

海の眼のいつか川の眼鮭のぼる 許勢 元貞

晩秋に海から川を鮭が遡上する。次第に必死な様相に変わる鮭の眼に注目したもの。母なる鮭、母なる川。句集『蝦夷富士へ』を上梓。必死なものを求める作者である。

ギャルソン（ボーイ）の応対、ことば遣いの感じがいい。

軒下に水槽のあり敗戦忌 三谷 正男

戦時中に軒下には火消用の水槽があった。その気付きに年齢が偲ばれる。火の粉払いのしたたきはもうないか。

吾も菩薩されど番外寝待月 櫻井 喬二

調子がいい。吾も菩薩の心境なれど、誰も聞いてくれない。いわば人生の番外扱いき。月は寝て待つものである。

虫鳴けば虫のにおいの廊下かな 細江 毛玉

虫の音に浸かった家。廊下が虫のにおいと鳴き声が染みついたものか。外気が自由な寺の廊下のような素朴さだ。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

九・一一忌百十階の望の月 有手 勉

虫しぐれ足に浮力のやうなもの 真弓ぼたん

黍嵐歩きだしたる土偶たち 名取 朋子

立秋や何はともあれ再起動 樋上 照男

空蟬の見据ゑる蒼き眼かな 岩倉ハル子

二人三脚真中は浮けり黍嵐 長尾裕美子

白露なり自づ定まるもの位置 玉木 愛子

立秋や少し堅めの目玉焼 田中 信寿

秋燕ブラットホームだけの駅 高瀬かず枝

長居せる黄泉の客人夜半の秋 河崎 國代